

「二〇一五年度大会パネルセッション」

津田左右吉と早稲田大学——記憶と記録——

岡本 天晴 小林 邦久
真辺 将之 土田 健次郎

趣 旨

(土田健次郎)

近現代の思想史家に関しては、もはやその研究を利用するだけではなく、その思想史家自身が研究対象になっているケースも多い。そこで急務なのは、その思想史家の資料の収集と保存、当人に直接接した人物の記憶の記録化である。二〇一五年度の日本思想史学会大会は早稲田大学で開催されたが、津田左右吉（一八七三—一九六一）は早稲田大学の前身東京専門学校出身であり、早稲田大学で教授となつた。その縁で津田関係の資料は早稲田大学に集中的に存在する。このパネルディスカッションでは、津田を取り

上げ、その「記録」と「記憶」の収集、整理、保存について、以下の三つの報告を行った。（岡本報告で取り上げた栗田直躬（一九〇三—一九九八）は早稲田大学卒業、同大学教授を勤める。戦前から常に津田の膝下に侍った文字通りの高弟である）。また大会当日は、早稲田大学図書館所蔵の津田関係資料を展示した。なお本パネルは、早稲田大学文学学術院「早稲田大学と東アジア——人文学の再生に向かって」（私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「近代日本の人文学と東アジア文化圏」との共催である。

栗田直躬先生から聞いたこと

——津田博士の裁判と世俗世間との関わり（岡本天晴）

生涯を学問に捧げ、純粋な学究生活を過ごされた津田博士（以下、博士）は、実は人間嫌いであつたと栗田先生はいう。博士は栗田先生が専任講師になるとき推薦者として唯一度だけ教授会に出席した。世俗に関わることはなるべく避けて学問に集中したが、しかし、世間を無視し傍観するということではなかつた。来客には誰に対しても「まだ良いではないか」といい真夜中まで引き留め話を続けたし、教室での演習では、時事問題を取り上げ、学生に新聞を丁寧に読むことを薦めている。戦時中、栗田先生が学徒動員などのことを「ご時世ですから」というと、博士から「この様な時勢（戦争状態）をつくっているのは国民一人一人の責任である」と、強くたしなめられたという。次下五年に渡る裁判中での、世俗との関わりを見ていく。

博士の学問は、日本・シナ・仏教思想を文献批判と緻密な論証により思想的に考察した専門的研究である。しかし、昭和十三年始めて一般読者向けに、『シナ思想と日本』（岩波新書）を上梓した。これは軍部の宣伝や国粹主義者たちの誤った思想への批判でもあり、日華事変の情勢もあつて大いに読まれ、博士の名が世間に知られることになる。

そのような中で南原繁の依頼より、昭和十四年東京帝大講師に着任し「シナ政治史」を講じた。この就任が引き金となり、一部の国粹主義者達が内務省に博士の取り締まりを要求し、また検事局に告訴した。『古事記及び日本書紀の研究』等の四著が発禁処分をうけ、一審有罪、二審は免訴となつた。有罪の理由は、「津田の研究（仲哀天皇以前の記紀の記載は歴史的事実の記録とは考えられないこと・崇神天皇以後は歴史的存在であること等）が、国民に皇室の存在について疑念を抱かせる」というものであつた。博士は、この事件を「体制側の思想弾圧」ではなく、「学問上の真偽の問題」と受け止め、裁判の過程で大部の学術的陳述書（『神代史及び上代史研究史資料』『上申書』）を書き、その弁明は大学の講義のようであつたという。

早稲田大学のこの事件への対応は、博士を擁護して学問の独立を守ろうとするようなものではなかつた。大学の執行部に博士の辞任を望む者がおり、大学に累が及ぶことを望まなかつた博士は、昭和十五年早大教授を辞任した。これが、裁判では「罪を認めての辞任」と受け取られ、不利となつた。裁判では和辻哲郎等多くの学者が証言に立つて弁護した。ところが、博士の学恩を受けた早稲田大学の某教授は、裁判官から、博士の四著が「如何に学説が正当であつても、歴史的伝統の上にある体制に、それが動揺や

損傷を与えるならば控えるべきではないか」と質問されて、YesともNoとも取れる証言をした。博士はその教授を二度と証言に呼ばないでくれといい、不快に思われたという。これがこの裁判に対する当時の早稲田大学の大方の態度であったという（筆者は、栗田先生からは、このことを後世に伝えるように特に言われてきた）。裁判中の博士の日常生活は、周囲が右翼の襲撃等を恐れ心配したが、いつもと変わらず紀尾井町の周りを散歩し、何ら怯むことはなかったという。因みに、戦後一転して早稲田大学は、博士に総長就任を要請したが断られている。辞退の理由の一つは、自分は大学運営についての理想はあるが、質を確保するため教員の数を半分にせねばないから、それは現実不可能である、というものであった。

以上、生涯に渡り学問のための学問をした津田博士が、世間や社会・政治に対しておもねることもなく傍観者の態度を取ることもなく、学問的真理の実生活での実現を重視した態度の一端を述べた。

早稲田大学図書館所蔵の津田左右吉関係資料について
(小林邦久)

早稲田大学図書館に収蔵されている、津田左右吉博士所縁の資料と、その受入経緯、整理状況について報告した。

現在整理済みものは、「津田文庫」(二四五七部、一万三七五冊)及び、「津田左右吉伝記資料」(一三二点)であり、書き込みが残る津田の旧蔵書、墨跡、遺稿、自筆写本等の一部が公開されている。このほか、原稿類・メモ類、公判関係記録、津田宛書簡、写真類ほか、津田個人に関わる物も含む大量の資料が残されている。これら未整理資料は、近代日本の人文学と東アジア文化圏(私立大学戦略的研究基盤形成支援事業)のプロジェクト「早稲田大学と東アジア」に於いて、公開に向けた目録化と一部画像データ化が進められている。

没後半世紀余を経過し歴史的人物となつた今日、生前の記憶が薄れる中、これ等の資料は、その「記憶」の裏付のもと、新たな研究資料として一日も早い整理・公開が望まれる。

津田文庫(文庫1)・・・収録数二四五七部、一万三七五冊
(日本語図書・・・一四四〇部、和漢書・・・三九四部、洋書・・・六八三部、和雑誌・・・八一部、洋雑誌・・・一部)

津田左右吉伝記資料(ヌ6 7856)・・・収録数一二二点
(日記、自筆原稿類(含未発表草稿、夫人浄書原稿)、墨跡、自筆写本、遺品類)

未整理資料・・・概数三六箱(昭和四十九年栗田直躬研究室からの移管資料の大半、及び津田博士所縁の方々の寄贈資料)

津田左右吉と東京専門学校・早稲田大学

——早稲田大学史資料センター所蔵資料を中心に
(真辺将之)

本報告では、津田左右吉と早稲田とのかかわりを、学生として在籍していた東京専門学校時代と、教員として在籍していた早稲田大学時代の二つに分けて、大学史資料センター所蔵資料を紹介しながら、若干の考察を行った。

東京専門学校時代の津田の動向を示す史料は非常に少なく、大学史資料センターの所蔵史料のなかにも、残念ながら津田の動向が直接わかるものはほとんど無い。だが周辺史料から津田の学生時代を跡付けることは可能であり、『早稲田大学百年史』の編纂過程で編まれた早稲田大学大学史編集所編『東京専門学校校則学科配当資料』でカリキュラムの再現が可能なこと、また講義録のもとに津田が受講した講義内容を推定することが可能なこと、当時の学校の機関誌である『中央學術雑誌』『同攻会雑誌』から、学校の諸行事や講師たちの主張、さらに当時の試験内容を知ることが可能であることを述べた。その上で、津田が東京専門学校の講義から直接的な影響を受けた形跡は認められないものの、政治や経済の社会とのかかわりを重視する東京専門学校の講義が、後年の津田史学の、人間の生活や社

会のあり方のなかで思想を捉えていこうとする姿勢につながった可能性があると論じた。また校友会名簿から当該期前後の卒業生の足跡を追うことによって、津田の時期の青年層が置かれていた状況を知ることでも可能であり、政治から文学へという、津田の前後の卒業生の動向変化の傾向は津田にも当てはまり、また卒業後の不遇も、津田の世代の多くの青年が経験したものであったことを論じた。

ついで、津田が早稲田大学の教員となつて以降に関わる、大学史資料センター所蔵の資料を紹介した。大学の公文書的なものには学科目関係の資料や履歴書などが多く含まれているほか、「三号館旧蔵資料」所収の津田左右吉講演筆記「どうして支那を知るか」が含まれていることを紹介した。また私文書としては、木村時夫旧蔵資料、西村朝日太郎旧蔵資料、田村専之助旧蔵資料などに津田の書翰が多く含まれており、特に田村専之助旧蔵資料のなかには全集未収録の書翰二九通と田村筆記の講義ノートが含まれており重要であると述べた。最後に、全集増補の後、所在がわからなくなった史料も存在し、史料状況の調査とその共有があまりなされなくなってきたのではないかと問題提起し、今後はさらなる資料の博搜と、史料情報の共有が課題であると述べて報告を締めくくった。

* 文中の「シナ」「支那」という表記は津田の用法に従ったものである。

(岡本天晴・防衛医科大学校名誉教授)

(小林邦久・早稲田大学図書館資料管理課長)

(真辺将之・早稲田大学教授)

(土田健次郎・早稲田大学教授)